

1 令和元年度実施事業・成果指標について（資料1）

委員意見	事務局回答
<p>鎌田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピック開催を契機に大学でもボランティアへの関心が高まっている。大学にも出前講座をPRしてはどうか？</li> <li>・次世代ボランティア人材育成事業は、大変良い事業。若い世代にボランティア等の裾野を広げるチャンス。学生の発想を活かした事業に育てたい。</li> <li>・ちばコロナ大賞は、応募数は減ったが、若い世代や女性(特にママ世代)の活躍が目立ち、県民活動の裾野が広がってきている。</li> </ul>	<p>(出前講座について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出前講座については、平成30年度から県内高等学校や大学などの教育機関に周知を図り、高等学校ではこれまでに3回講座を実施し、計765名の生徒に参加頂きました。</li> <li>・次年度も大学から出前講座の実施要望を頂いており、引き続き、高等学校や大学等への広報活動に努めてまいります。</li> </ul>
<p>小松委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指標1-2：県民活動への理解や参加促進について、「ボランティアに参加したことのある人」の割合が、28.2%から43.6%へ15.4ポイント増加している点はとても良いこと。資料1補足の中に「ちょいボラ」と「オリ・パラ都市ボランティア」の要因分析があったが、昨年の台風・大雨による被災地支援も大きいのではないかと推察される。日頃は関心があってもなかなか行動には移せない人も、具体的かつ大きな困りごとやイベント等があると行動に移ることが分かったので、大事なことは、この機運と行動成果を持続させる仕組みづくりと情報発信である。</li> <li>・このようなボランティアの方々の実際の活動と地域の感謝の声などを発信することが、ボランティアに関心のある人や実際に参加してみようと思う人を増やす最良の方策である。オリ・パラでは、ボランティアと外国人観戦者(来訪者)との様々なコミュニケーション場面と外国人の方の反応などを是非発信してほしい。</li> <li>・「ボランティア」に抱く印象は人それぞれだが、テレビ等で報道されているようなものを想像する人が多いと思われるので、身近な地域でのちょっとした活動「ちょいボラ」はとても重要。例えば、毎週子どもたちにサッカーやバスケットボールを教えている、地域の美観形成の活動に参加しているなども対象だが、こうした人たちは「参加」と回答しているのだろうか。</li> <li>・このような人も含めると、もっと裾野は広いような気がする。ちょっとしたことも含め、</li> </ul>	<p>(成果指標について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指標1-1：市民活動団体、ボランティア活動に関心がある人の割合、指標1-2：ボランティア活動に参加したことのある人の割合、指標2-1：ボランティア活動に継続して参加している人の割合、指標3-1：市民活動団体の活動へ参加(活動・寄附・支援)している人の割合については、「第58回県政に関する世論調査」により得られた指標です。</li> <li>・この調査期間は、令和元年8月23日から令和元年9月13日であるため、これらの指標に対する令和元年台風15号等災害の影響は限定的であると考えています。(令和元年台風15号は9月9日に千葉県に上陸し、災害ボランティアセンター等の開設は9月10日以降であるため。)</li> <li>・しかしながら、特に指標1-1：市民活動団体、ボランティア活動に関心がある人の割合、指標1-2：ボランティア活動に参加したことのある人の割合、指標3-1：市民活動団体の活動へ参加(活動・寄附・支援)している人の割合については、台風15号等による影響を受け、来年度の成果指標の結果が上昇する可能性もあると見込んでいます。</li> </ul> <p>(ボランティアの定義について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・委員のご指摘のとおり、ボランティア活動のイメージには個人差があり、自身で「ボランティアをしている」という認識がなくても、実はボランティアに定義される活動をしているケースもあるものと思われます。</li> <li>・県政に関する世論調査では、ボランティア活動とは、「市民の自発性に基づき地域や社会</li> </ul>

<p>このような活動もどんどん増やしていくことが重要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートで把握できるとなおよい。</li> <li>・成果指標 2-1：ボランティア活動に継続して参加・・・も同様。</li> <li>・実際にはもっと（参加している人が）いるのではないか。</li> <li>・身近な市町村で発信・働きかけ・把握・推進していくことが重要。</li> <li>・指標 3-1：市民活動団体への寄附について、この指標も上昇していることは良いこと。これ以外に、昨年台風・大雨の被災地自治体へのインターネットによる寄附は、多数の県民他が参加したのではないか。「関係人口」が重視されているが、こうした多くの人々・県民が寄附をしているのだと思う。団体への寄附ではないが、このような動きは県民一人ひとりの行動といった点で、裾野が広がったのではないかと考える（推察だが）。</li> </ul>	<p>に貢献する活動(町会・自治会の活動、PTAの活動や学校行事の手伝いなども含む)のことであり、市民活動団体が行うボランティア活動への参加のみならず、個人として行うものを含むボランティア活動全般を指します。」とし、ボランティアについて世論調査の回答者に具体的にイメージしていただけるようにしています。</p> <p>(「#ちょいボラ」の情報発信について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「#ちょいボラ」の情報発信については、Facebook「ちばボランティア情報局(下記URL)」により、「#ちょいボラ」のイベント等での活動の様子などを掲載しています。 <a href="https://www.facebook.com/chibavola2020/">https://www.facebook.com/chibavola2020/</a></li> </ul> <p>(都市ボランティア活動に関する情報発信について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・都市ボランティアは、東京2020大会開催時に会場周辺駅や空港などで千葉県を訪れる多くの方々に、交通案内や観光案内などの「おもてなし」を行うボランティアです。</li> <li>・委員ご指摘のとおり、来訪者との交流を含めた活動の様子は、ホームページやFacebookなどの広報媒体で発信するとともに、動画として記録し、東京2020大会の都市ボランティアの活躍を「他のボランティア活動の参加促進」や「ボランティア参加者の裾野を広げる取組み」などに活かしたいと考えています。</li> </ul>
<p>山崎委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次期計画の事業内容・成果指標について、全体的に結果も前回より上回っている項目もあり、数字的にもある程度満足がいく内容ではないかと思いますが、「2.地域コミュニティを支える人材づくり」は、目標値はクリアしているものの、全項目と比較して見ると、まだまだ数値が低く感じられます。</li> <li>・この項目の数値が今後の次世代ボランティアの育成にも直結してくるのではと感じていますので、今一度、事業内容等を見直し、強化していくことが必要なのではないかと思えます。</li> </ul>	<p>(次期計画の事業内容・成果指標について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料2の補足1に記載のとおり、来年度は次期県民活動推進計画を策定しますので、成果指標の設定についても検討を行ってまいります。</li> <li>・委員ご指摘の事項である「地域コミュニティを支える人材づくり」については、特にオリンピック・パラリンピックボランティアのレガシーが重要であると考えています。今後、都市ボランティアの皆様継続的にボランティア活動に参加して頂く方策について、検討を進めてまいります。</li> </ul>
<p>佐瀬委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・団体の活動期間を指標の一つとして、また、参加について、「活動」と「寄附」「支援」の</li> </ul>	<p>(成果指標について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記のとおり、次期県民活動推進計画の策定作業の中で見直しを検討してまいります。</li> </ul>

<p>それぞれで指標としてはいかがか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寄附は単年度ごとの変化のほうを意識を見る指標としてはよろしいのではないか。</li> <li>・「#ちょいボラ」キャンペーンについて、教育部局との連携は？また、SNSを通じた情報の拡散はどのような対応となっているのか？</li> </ul>	<p>(「#ちょいボラ」キャンペーンについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンペーン活動を展開するに当たり、県教育委員会等関係課と事前調整を行いました。また、“しおり”を作成し、県内の学校等へ配布するなど、児童・生徒に向け広く周知を図りました。</li> <li>・また保護者に対しては、Facebook「ちばボランティア情報局」や教育広報誌「夢気球」により周知を図りました。</li> </ul>
--	---

## 2 令和2年度事業及び予算の概要について(資料2)

委員意見	事務局回答
<p>鎌田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コラボ大賞のチラシが充実することは喜ばしい。色々な機会を使って情報を広げていただきたい。</li> </ul>	<p>(コラボ大賞のチラシについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回作成したコラボ大賞のチラシには、多様な主体が行政と連携・協働して地域課題の解決に取り組む優良事例が数多く掲載されています。本チラシを当課の様々な事業で活用し、連携・協働による取組みの効果やすばらしさを広く発信してまいります。</li> </ul>
<p>牧野委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市民活動マネジメント事業について、今年度の受託団体として感じることは、NPO法人の実務講座への参加申し込みは、キャンセル待ちが出るほどの要望があり、法人認証を担当する県の役割として継続的に実施するべきであると思います。</li> <li>・6回講座で200名が受講され、1名当たりの受講料を見ると4,500円余りの予算になります。経費的には厳しい運営となっていますので、R2年度では予算が減額されていますが、募集要項の実施回数や参加者数等を検討したほうが良いと思います。</li> </ul>	<p>(市民活動団体マネジメント事業について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予算の削減は、委託事業者を決定する審査会の会場費を削減したことによるもので、委託料は本年度と同額となります。</li> <li>・また、講座の実施回数や参加者数については、講座の内容などに応じて適切な設定ができるよう受託団体と調整することとし、令和3年度以降の仕様書に反映できるよう検討してまいります。</li> </ul>
<p>白井委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和2年度は、「外国人おもてなし語学ボランティア育成事業」の予算が計上されていませんが、これは今年のオリンピック・パラリンピック大会への準備のため行っていた事業です。</li> <li>・アンケート調査では、都市ボランティア終了後のボランティア活動として、国際空港や国際協力に関する活動が66.8%と多く挙げられており、観光立県を挙げている以上、本事業は継続してもらいたいと思います。</li> </ul>	<p>(外国人おもてなし語学ボランティア育成事業について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業は、東京2020大会への準備のために行った事業で、本年度をもって終了いたしました。</li> <li>・次年度以降は、本事業(講座)の受講者に対し、メールマガジンにより、県内で開催される各種スポーツイベントや東京2020大会関連情報、各種ボランティア講座などをご案内するなど、より実践的なボランティア活動に参加いただくよう努めてまいります。</li> </ul>

## 小松委員

### (地域コミュニティを支える人材づくり)

- ・オリ・パラボランティア関係で予算も大幅に増額となっている。この機を捉え、是非とも人材育成に注力してほしい。新型コロナの関係で開催自体どうなるかわからないが、大会成功の大きな要因の一つは「ボランティアの活躍と県民のおもてなし」なので、是非とも成功させてほしい。
- ・「レガシーの創造」について、大会自体は一過性なので、都市ボランティアの方々を何らかの形で組織化・ネットワーク化して「思い」と「活動」を継続させる取組が重要である。
- ・また、都市ボランティアには採用されなかったが、ボランティアに関心のある県民や、オリ・パラを機におもてなしや支え合いなどに参加してみたいと感じた県民の意向や機運を顕在化させ、大会後も持続させる取組も重要である。
- ・経済活性化の観点で活躍が期待される分野は、「観光(インバウンド)」と「外国人労働者への対応・サポート」である。観光においては、入込数自体を増やすことは重要だが、周遊型・物見遊山の薄利多売で大勢集めるのではなく、改めて体験・滞在型に軸足を置き、「消費単価を上げる」ことが重要である。地域の魅力を高め、体験・体感をサポートしてくれるガイドやコーディネーターが必要であり、地域を愛し、地域をよく知る地域の方々が対応することが重要である。国内旅行者では、今後「バリアフリーツーリズム」が重要になる。障害を持った方、加齢による体力減退などで、旅行や現地でのアクティビティを控える人が増加する。こうした人々を一人でも多く誘致し取り込むことが重要である。その際、欠かせないのがボランティアの存在である。
- ・今後増加が予想される外国人労働者の方々への対応でも、語学やコミュニティへの溶け込みの面で(ボランティアの)大きな役割が期待される。地域の自治体と経済団体・個別企業等と密接に連携して進めてほしい。
- ・重要なことは、これら地域経済活性化(経済活性化効果)にも資するボランティア活動は、関係事業者と連携し、有料で行われることである。きちんと収入を得て実施されることが重要であり、そのことが持続的な取り組み、自走化につながる。

### (オリンピック・パラリンピックによる機運の高まりを顕在化・持続させる取組について)

- ・千葉県では、「チーム千葉ボランティアネットワーク」という仕組みにより、東京2020大会以降でのボランティア活動の継続に向け、組織化を進めています。
- ・また、成田市でもスポーツボランティアの登録制度を設け、試験的に運用しています。
- ・県では、県民活動推進計画にも記載しているとおり、都市ボランティアのみならず東京2020大会に関わった多くの方々や、大会をきっかけにボランティアに関心を持った方々が、今後、“地域を支える人材”になっていただくことを見据え、ボランティアの継続意欲を維持するための情報発信を行ってまいります。一方で、ボランティアの活用に消極的であったり、ボランティアの活用の仕方が分からない団体に向けて、どのような施策を行っていくか検討を進めていく必要があると考えています。そのため、次年度「都市ボランティアレガシー検討部会」で議論・検討してまいりたいと考えています。

### (高齢者の活躍の場づくりについて)

- ・県政に関する世論調査では「市民活動団体の活動や、ボランティア活動に関心がありますか。」という調査を行っています。
- ・全体では、「大変関心がある」が6.3%、「まあ関心がある」が42.6%ですが、60~64歳の男性は「大変関心がある」が7.9%、「まあ関心がある」が46.0%、65歳以上の男性は「大変関心がある」が10.6%、「まあ関心がある」が47.3%となっており、男性高齢者のボランティアへの関心が高い結果となっています。
- ・当課では、定年退職する県職員向けのセミナーにおいて、ボランティアを啓発するチラシを配布し、ボランティア活動への参加促進に取り組んでいます。
- ・また、千葉県の都市ボランティア採用決定者のうち31.2%は60歳以上の方となっています。今後、高齢のボランティア希望者の方々の受け入れについても研究してまいります。

### (他のご意見等について)

- ・委員から大変重要な着眼点のご指摘や、今後の参考とすべきアイデア等を数多く頂き、感謝申し上げます。「都市ボランティアレガシー検討部会」において議論・検討させていた

<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性・高齢者の活躍の場づくりへの注力も重要である。地域を良くしたい「思い」と「知見・ノウハウ」を有する男性の活躍への期待は大きい。日常生活の援助、例えば雑草の駆除や庭木の刈り込み、電気器具の修理、階段手摺設置、病院の送迎等々の要望に対応したり、あるいは長年培った専門性・技術でベンチャーや中小企業の経営・技術支援を行うなどの取組がある。こうした企業退職者の「継続的社会貢献の場＝活躍の場」を創出することが重要である。今までにない色々な「化学反応」が起きると思う。</li> </ul>	<p>だきたいと思います。</p>
<p>山崎委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金額の大きな事業や参加人数の多い事業については、今後の事業継続の為に、参加者の意見等をアンケートなどの形で汲みあげ、次年度事業に反映させる取り組みがあると良いと思います。</li> </ul>	<p>(事業参加者に対するアンケートについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当課主催のセミナーや委託事業では既に参加者へのアンケートの回答をお願いしている事業もあり、その結果を次年度の事業改善の参考としています。</li> <li>・今後もアンケート調査を継続し、事業改善の参考としてまいります。</li> </ul>

### 3 都市ボランティアアンケートの結果について(資料3)

委員意見	事務局回答
<p>鎌田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・都市ボランティアアンケートの回収率がやや低いように思われる。</li> <li>・都市ボランティアへの参加がボランティア活動全般を底上げできる期待もてる。ただし、国際・スポーツだけでなく、いかに活動の裾野を広げるかが課題である。</li> </ul>	<p>(東京2020大会終了後の方策について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの委員から御指摘いただいたとおり、東京2020大会の都市ボランティアが活動を継続していくためには、 <ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア同士の交流を更に深めていくこと</li> <li>広く県内のボランティア情報や他分野のボランティア情報も含めて、有益な情報を発信し続けていくこと</li> <li>ボランティア活動ができる“場づくり”(ボランティアと活動のマッチング)をしていくこと</li> </ul> </li> <li>の3点が重要であると考えています。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症の影響で、現在、上記～に資する“交流イベント”などの実施が難しい状況ですが、県ではボランティアの継続意欲を維持し、活動の裾野が広がるよう、ボランティア情報の発信をメーリングリストにて行いつつ、ボランティア活動が継続できる“場づくり”について、県や市町村・関係部局とも連携しながら議論・検討してまいります。</li> </ul>

<p>山田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアに関するアンケートに関して、今夏に迫る東京五輪・パラリンピックに向けて県民のボランティアに対する機運が高まっているのを感じた。各種啓発キャンペーンが奏功しているようだ。指摘にもあるように、大会後も継続し、あるいは発展させていくための取り組みが求められる。</li> <li>・例えば、千葉市のようにボランティア活動された人を登録し、ネットワーク化することで、新たなニーズがある時に募集や告知を速やかにかつ幅広く情報発信できるシステムを構築すべき。千葉市内にとどまらず、県内広範囲でボランティアが行き来できる環境がより望ましい。</li> </ul>	<p>(東京 2020 大会終了後の方策について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記のとおり、次年度に新設する「都市ボランティアレガシー検討部会」で議論・検討してまいりたいと考えています。</li> <li>・千葉市のボランティアネットワークの運営状況を参考にしていると、ニーズとシーズの違いがあり、思ったような活性化をシステムのみで行うのは難しいのではと思う所があります。</li> <li>・多くの企業・団体がボランティアの力を活用したいと思えるような土壌を作ることにより、ボランティア側の選択肢を増やすにはどうしたらよいかという選択肢も持ったうえで今後検討を進めてまいりたいと考えています。</li> </ul>
<p>牧野委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すでに地域活動、ボランティア活動に参加している方が多いようですが、参加者のうち働く世代の方々がオリパラ終了後も継続した活動につなげるためには、「工夫した参加プログラムの提供」を検討すべきと思います。</li> <li>・働く世代はシニア世代と違い、活動する時間に限りがあり、「期限付きプログラム」等があると思われる。</li> <li>・(プロボノ)スポーツ、国際協力分野以外の分野のボランティア情報も提供していただきたいです。</li> </ul>	<p>(東京 2020 大会終了後の方策について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・限られた日程でもボランティアに参加できることから、期間限定プログラムは働く世代や学生などにも受け入れられやすいと考えられます。</li> <li>・そのようなプログラムをより多くの団体が取り入れ、活用できる方策をオリンピックレガシーとして今後、検討を進めていきたいと考えています。</li> </ul>
<p>奥野委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症の影響で、オリンピック延期論が出てきました。関係者はすでに検討されているでしょうが、都市ボランティアへの関心を継続させる方策として下記のことを提案します。 登録しているボランティアの交流会をエリアごとに年 2 回程度行う。 研修とは別にして、ボランティア同士が知り合い、繋がる交流会(できればワンドリンク付きパーティ形式、1,000 円程度の会費制でもよい)とし、地元の国際交流組織に協力してもらい外国籍の方にも参加してもらおう。 (ボランティア活動と国際交流活動の 2 つの視点が入り、新しい活動が生まれるのではないかと期待しています。)</li> </ul>	<p>(東京 2020 大会終了後の方策について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、オリパラの 1 年延期を受け、今後のボランティアが活動するまでの期間がまるまる空いてしまうことの問題点は認識しています。開催には、新型コロナウイルス感染症の鎮静化が必要などの問題はありますが、県庁各課や市町村とも連携を深め、都市ボランティアが参加できるイベントの紹介を受け、情報を発信するなど新たな交流の場の創出や紹介についても今後取り組んでまいりたいと考えています。</li> </ul>

<p>白井委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>都市ボランティアアンケートの結果について、「今回の都市ボランティア応募から現在までにボランティア活動への意欲が高まりましたか」の問いに対し、「大いに高まった」が42.1%、「やや高まった」が44.4%と合わせて86.5%ありました。</li> <li>都市ボランティア以外の新たなボランティア活動の問いについて見ると、高齢者、子供達、障害者を対象とする活動の率が低く、これからの少子高齢化社会に向けて、「福祉ボランティア（高齢者・青少年・障害者等）の活動ができる施策」を考える必要があります。</li> </ul>	<p>（東京2020大会終了後の方策について）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>都市ボランティアの研修には、障害について学ぶパートが含まれており、パラリンピック・ボランティアを希望し、今後このような活動に加わりたいと考えている方も一定数いると認識しています。</li> <li>一方、障害者スポーツに関わる団体はノウハウやスタッフも少なく、このようなボランティアを受け入れる余力がないところもあることから、受け入れ側に向けた施策も検討していく必要があると考えています。</li> </ul>
<p>小松委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>都市ボランティアのアンケートは、とても参考になる有意義な結果が表れていると思う。</li> <li>さらに深く分析する上で、可能であれば以下について対応いただきたい。</li> <li>質問2「ボランティア活動への意欲の高まり度合い」について、「大いに高まった」（42.1%）と「やや高まった」（44.4%）とあり、合計約9割の人の意欲が高まったことになるが、おそらく「大いに高まった」人と「やや高まった」人では考え方などで差があると推察される。観光の調査では「大変満足」した人と「やや満足」した人では「再訪したい」と思う比率に大きな開きがあることが多い。従って、以下のクロス集計・分析の結果を示していただきたい。</li> </ul> <p>【クロス集計・分析：「大いに高まった」・「やや高まった」×質問7、質問8】</p> <p>【仮説】「大いに高まった」と「やや高まった」では「オリ・パラ後もボランティアを継続したい」（質問7）の回答比率に差がある。</p> <p>「大いに高まった」人はどのような活動をしたいか（質問8）このほか「大いに高まった」人の属性なども分析すると何か見えてくるかもしれない。</p>	<p>（アンケートのクロス集計・分析について）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>質問2と質問7・8についてクロス集計を行いました。別紙「資料3補足2都市ボランティアアンケートクロス集計」をご参照ください。</li> </ul> <p>クロス集計の結果概要は以下のとおりです。</p> <p>質問2と質問7のクロス集計</p> <p>質問2で</p> <p>「1大いに高まった」と回答した者のうち、98.8%は大会終了後も活動継続したいと回答</p> <p>「2やや高まった」と回答した者のうち、94.8%は大会終了後も活動継続したいと回答</p> <p>「3特に変化はない」と回答した者のうち、93.9%は大会終了後も活動継続したいと回答</p> <p>「4やや低下した」と回答した者のうち、100%は大会終了後も活動継続したいと回答</p> <p>しており、応募以降ボランティア活動への意欲が高まった者ほど大会終了後のボランティア活動意向が強い傾向がある。</p> <p>質問2と質問8のクロス集計</p> <p>質問2で「1大いに高まった」と回答した者など以降にボランティア活動への意欲が高まった者大会終了後のボランティア活動意向が強い。これは、現時点で都市ボランティアが関わっている「国際」や「スポーツ」の分野に限らずすべての分野で同様の傾向である。</p>
<p>山崎委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大会以降もボランティアに参加したいと思っている方の割合が96.4%も有る事は大変素</li> </ul>	<p>（大会後のボランティア活動意向について）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「いいえ」と回答した方達の多数が、「活動に参加する時間がない」ことを理由とした件に</li> </ul>

<p>晴らしい事だと思えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しかし『いいえ』で回答した方達の多数が、「時間がない為」と回答しているので、改めて参加時間の見直しや、自由記述にて意見を更に汲みあげ検討していかなくてはならないのではないかと思います。</li> </ul>	<p>ついて、内閣府調査によると、「活動時間の不足」は、一般市民がボランティアに参加しようと思わなかった理由の最上位となっています。(内閣府「市民の社会貢献に関する実態調査」等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>そのため、都市ボランティアの活動継続及びその他一般県民へのボランティア普及啓発のいずれにおいても、「活動時間」の視点は、県が施策を検討する際の重要事項であると認識しています。</li> </ul>
<p>佐瀬委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理念ではなく、より具体的な取り組みの実例からボランティア活動のイメージを作らせる。また、一緒に活動する仲間づくりが、以降の継続につながっていくと考えます。</li> </ul>	<p>(東京 2020 大会終了後の方策について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア活動のイメージを作ってもらうために、例えば都市ボランティア同士の相互交流の機会を作ることができれば、活動事例の相互紹介もできると思われます。今後、具体的に事例が集まってくれば、情報交換・発信の場を検討してまいります。</li> </ul>
<p>船水委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認事項として、「都市ボランティアアンケートの結果について」の中の”質問 5”と”質問 6”での割合を算出する分母が違ってきます。(両方とも分母は、「117」になるのではないのでしょうか。)</li> </ul>	<p>(都市ボランティアアンケートについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ご指摘のとおり修正しましたので、別紙資料 3 をご参照ください。</li> </ul>

#### 4 台風 15 号等災害におけるボランティア・NPO 団体等の活動について (資料 4)

委員意見	事務局回答
<p>鎌田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>千葉工業大学では、台風災害復旧ボランティアとして延べ 100 人以上の学生と教職員が、ほぼ 1 週間連日で南房総市に入った。</li> <li>地方創生に向けた当市のニーズと千葉工業大学のシーズとのマッチングによる交流活動が日常より盛んであり、日常の交流が重要であるとの教訓を得た。</li> </ul>	<p>(大学生による活動について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>県内被災地での千葉工業大学生の皆様の活動に感謝申し上げます。</li> <li>災害対応において、関係者の「日常の交流が重要」という点については、委員ご指摘のとおりであり、災害時に被災者支援を行う関係機関(関係者)が、日頃から“顔の見える関係”を築くことができるよう、次年度以降、千葉県市民活動支援組織ネットワークの「防災作業部会」などで検討してまいります。</li> </ul>
<p>牧野委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>NPO クラブは、千葉県災害ボランティアセンターの立上げ時から、中間支援組織としてオブザーバー参加し、活動してきました。</li> <li>主には、市町社協災害ボランティアセンター、ボランティアグループ(鋸南町、南房総市、富</li> </ul>	<p>(台風 15 号等災害について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今回の災害では、特にブルーシート展張等の作業について県外の NPO 等からご支援いただいておりますが、委員ご指摘のとおり、住民ニーズの掘り起しや支援に継続的に対応するためには、地元や県内の NPO 等によ</li> </ul>



津市、鴨川市、館山市、八街市、富里市)16 プロジェクトに一般社団法人 Smart Supply(スマートサプライ)ビジョンと連携し、「ちば台風 15号支援プロジェクト」を開設し、全国のamazon ユーザーから災害支援物資 3,178 点を提供しました。

- ・その後、NPO法人ディープデモクラシーと共に「千葉南部災害支援センター」を立ち上げ、活動しています。
- ・また、鴨川市拠点で活動団体の情報共有会議、278 世帯(鋸南町、南房総市)への個別訪問調査活動を実施します。
- ・都市部の市民に呼びかけ、4/29(祝日)に「第2回ボランティアバス」を運行し、太房岬公園の倒木処理やカーネーション団地のハウスのガラス破片の片付けを予定しています。
- ・公益財団法人ちばのWA地域づくり基金で、「千葉県台風・豪雨災害支援基金」を立ち上げ、全国から寄附を募りました。(2/29 現在の寄附が 175 件 7,110,290 円、助成が 26 件 2,978,000 円です。4 月から第3次助成を行います。)
- ・災害ボランティアセンターは、外部からのボランティアを受入れ、住民ニーズとマッチングする機能があるが、限られた期限での活動にならざるを得ないので、取り残された住民ニーズの掘り起しや支援に対応するためには地元や県内のNPOが継続して担うことが求められます。
- ・次の災害が起きても県内全体で連携できるよう、災害ボランティアセンターとは協力・連携しながらも、「すそ野の広いネットワークづくり」が必要です。中間支援組織が参加する千葉県市民活動支援組織ネットワーク会議に期待します。

#### 大野委員

- ・全国 23 万 3 千人の民生委員は、(災害時は、)高齢者の見守り訪問活動を一番に行っています。特に、阪神淡路大震災をはじめ、中越、東日本、熊本や北海道の地震など、数え切れませんが、その都度、安否確認をしています。
- ・市町村から高齢者や要援護者の名簿をいただき、一人一人の委員がマップを起こし、台帳を作成し、災害が発生すると一件ずつ確認して報告する作業を行っています。
- ・特に今年は、千葉県内でも今迄にない大きな災害がありました。ライフラインも途絶え、

る支援が必要です。

- ・県内のNPO等への意識啓発やネットワークづくりについて、次年度以降、千葉県市民活動支援組織ネットワークの「防災作業部会」などで検討してまいります。

(民生委員による災害時の活動について)

- ・委員からご意見いただきました民生委員の皆様の活動により得られた被災者に関する情報は、安否確認などの面だけではなく、被災者支援を行う他の様々な機関においても大変重要な情報となると思われます。
- ・個人情報の観点から、具体的情報提供はご本人様の同意無くしては難しいとは思いますが、「特定の地域(地区)において多い被災者ニーズ」などが把握できれば、地域(地区)ごとに必要な支援対策を速やか、かつ効果的に実施できると考えられますので、民生委員

<p>水害の中を徒歩で確認し、市町村のセンターに報告されたと伺っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報由市町村から民生委員一人一人が供与されているわけですから、守秘義務の厳守を徹底して下さるようお願いしています。 今回の台風 15 号等災害時には、ボランティアセンターへの手伝いもさせていただいた所です。(各地区からこられるボランティアさんのお世話、炊き出し等をお手伝いしました。)</li> <li>・「民生委員」は、ご自身の頭の中に地域のマップがインプットされ、一年一年更新され、いざという時に名簿やマップを持たずに安否確認が出来る素晴らしい活動をしています。</li> </ul>	<p>の皆様が収集された被災者に関する情報を“地区別に被災者ニーズの傾向を整理する”など、個人情報を含まない形式で県や市町村にご提供いただけると幸いです。</p>
<p>白井委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年の台風 15 号・19 号及び 10 月 25 日の大雨で県内は大きな被害を受け、長生郡市管内でも、茂原市、長南町、長柄町で災害ボランティアセンターが設置され、県内外から多くのボランティアに支援いただきました。</li> <li>・しかしながら、ボランティアで対応できるニーズと行政に対応していただくニーズ、また、専門業者に対応していただくニーズなどの判断と適切な対応が求められました。</li> <li>・そのためにも、地域の防災活動や災害時の支援活動において、中心的な役割を担う「災害対策コーディネーター」の養成に力を入れることが必要であると考えます。</li> </ul>	<p>(災害対策コーディネーターについて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・委員ご指摘のとおり、災害対策コーディネーターは、災害時のボランティア活動において重要な役割を担う存在です。次年度以降、千葉県市民活動支援組織ネットワークの「防災作業部会」において、災害対策コーディネーター養成講座を実施する防災政策課とも連携しながら、適切な対応ができる体制づくりを検討してまいります。</li> </ul>
<p>小松委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特に県内から継続的にボランティアに来ていただいている個人・団体の方々に、「継続的に当被災地支援に関わっていききたいと考える個人・団体の方々に」と「地域の NPO や団体」及び「自治体」とで「継続的な意見交換と情報共有の場」を設けてはどうか。</li> <li>・復旧・復興の進捗状況によって意見交換や情報の中身も変わってくるので(例：観光振興など)自治体においては、都度、適切な部署も加わることを望ましい。</li> <li>・継続的に当被災地支援に関わっていききたいと考える個人・団体の方々に(含：寄附者)(=ある意味当地域のファン・関係人口)を増やしていくには、被災状況からボランティア活動状況、復旧・復興状況など、ボランティアの方々に加え、地域の方々の顔や声も含めた現</li> </ul>	<p>(台風 15 号等災害について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・委員からご意見いただきました趣旨の意見交換や情報共有については、昨年本県を襲った一連の災害の際、県外の間接支援組織である認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)や、県内の NPO が昨年より運営を開始した「千葉南部災害支援センター(鴨川市)」を中心に、「情報共有会議」という名称で、平日の夜間などに複数回実施されました。</li> <li>・今後も発災時には、これらの団体などと連携を図りながら、関係機関や団体等と被災者支援に関する情報の交換・共有に努めてまいります。</li> <li>・又、継続的なボランティア参加を促すため、県災害ボランティアセンター閉鎖後も災害ボランティアセンター特設サイトやちば災</li> </ul>

<p>状・実情の正確な情報に加え、元気の出るような情報発信・情報交流を、継続的に行っていくことが重要かつ効果的と考える。</p>	<p>害ボランティア情報の facebook アカウント（約 2600 人がフォロー）において関連情報を発信しております。今後も災害ボランティアセンターの事務局である県社会福祉協議会と協議しながら運用してまいります。</p>
<p>山崎委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の台風被害で、私が住む多古町では 70% 近くの住宅で 10 日間の停電被害があり、中には井戸水を生活用水として使用している家庭が多数あった為、吸い上げるポンプが使用できず水を一切使用できない事態となり、発生 5 日後には商工会青年部が先頭となり地元社協と連携し独居で暮らすお年寄りの家庭を中心に一軒あたり 200 リットルの生活用水を地元消防団、有志の町民と連携し配布してまわりました。</li> <li>・必要とされている方のニーズを取りまとめる場所が点々バラバラであった為、情報伝達がうまく伝わらず、初動が後手にまわっている感じを受けました。</li> <li>・多古町でボランティアセンターが立ち上がった日は、災害後 10 日経ってからでした。</li> <li>・既に停電が解消し始めていた為、作業内容は倒壊したビニールハウス等の撤去等ばかりでした。</li> <li>・そこで改めて感じた事は、ボランティアの皆さんは発生後すぐにでも支援頂ける意向があったにも関わらず無駄にせざる負えない状況があったという事です。いざという時の為に日頃よりの横の連携、協力体制を地域ごとに確立しておかなくてはいけないと強く感じました。</li> <li>・「災害時の活動はやはり初動が大切」だと思います。様々なパターンの災害を想定し迅速に行動へ移せるよう、地域単位でのボランティア組織が必要ではないかと考えております。</li> </ul>	<p>(被災者ニーズとボランティア活動について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年本県を襲った一連の災害において、被災者のニーズとボランティアの活動分野がマッチ（適合）しない事例は、少なからず生じていたと思われます。</li> <li>・その要因は様々あると思いますが、委員ご指摘のとおり、地域において、日頃から連携・協力体制を構築し、様々な災害の想定と災害の初動時に地域内で迅速な支援行動ができる体制、また、ボランティアを受け入れる体制も準備しておくことが重要と思われます。</li> <li>・今後の課題として、次年度以降、千葉県市民活動支援組織ネットワークの「防災作業部会」で検討してまいります。</li> <li>・また、ボランティアセンターと市民活動支援センターの合同研修において、これまでも災害連携をテーマに実施しております。今後も引き続き研修を実施し、災害時の様々なボランティア・NPO 等へのコーディネート機能を強化してまいります。</li> </ul>
<p>佐瀬委員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初動時における災害ボランティアの活動から、被災地域の行政等の既存組織や市民活動への継続（復興）について、スムーズにつなげていけるような取り組みも考慮する必要があるのではないかと考える。</li> </ul>	<p>(災害初動時から復興・復興の活動について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・被災者支援は災害初動時から復旧・復興に至るまで、様々な機関が関わり実施されますが、委員ご指摘の「支援の引き継ぎをスムーズに行うこと」は大変重要な事項であると認識しています。</li> <li>・今後の課題として、次年度以降、千葉県市民活動支援組織ネットワークの「防災作業部会」で検討してまいります。</li> </ul>